

バベルとペンテコステ

メーストル『聖ペテルブルク夜話』の世界観

加藤 一輝

本論は、ジョゼフ・ド・メーストル（1753-1821）畢生の大著『聖ペテルブルク夜話』（以下『夜話』）の掉尾たる第10話と第11話の読解を目的としている。初期の主著『フランスについての考察』（以下『考察』）で提示された、革命の次に「反革命」が訪れるというメーストルの世界観は、フランス革命から一定の年月を経て書かれた『夜話』の最後で、バベルとペンテコステという旧約・新約聖書の言語にまつわる逸話を援用して語り直される。そこに着目しながらメーストルの思想の総体を探るのが本論の趣旨である。

メーストルはフランス革命の直後から革命に厳しく対峙した反動思想家の祖であり、初期の著作では政治思想を、後期には神学的世界観を展開している。政治的な議論は『夜話』ではほとんど見られないが、副題に「摂理の現世的政体についての鼎談」とあるとおり、後期の著作においても主眼は現世における秩序の構築であり、人間によって破壊された全体性の回復であった。

だが破壊の後の再構築とは実際どのように為されるのか。ここが反動思想の難点である。というのも、破壊に帰着せざるを得ないであろう急進的変革を戒め、革命を予防しようとする保守的な態度とは違って、既に起こってしまった革命を受容した上で、それに匹敵するダイナミズムでもって次なる転回が起こり、以前とは別種の新たな秩序が生成される、と期待するのが（少なくともメーストルの言う）反動であるが、その来たるべき跳躍とはどのようなものか、未だ誰も知らないのだ。それゆえ『考察』で述べられる「反革命」なる概念も、捉えがたいものとなっている。

他方で『夜話』もまた、内容を概括すれば理解が容易になる書物ではない。形式からして要約を拒んでいるのだ。その冒頭は、このようにはじまる。

1809年7月、とても暑い日の夕どき、わたしは舟でネヴァ河を上っていた。枢密顧問であり聖ペテルブルクの元老院議員でもある T 氏、そして祖国で吹き荒

れる革命の嵐と多くの奇怪な事件とに追いやられてロシアの首都に来ている若いフランス人の騎士 B 氏が一緒であった¹。

この T 氏も B 氏も実在の人物であり、実際に鼎談が行なわれたことは確かなようだ²。ときにフランスふうの皮肉で「伯爵」をやりこめる「騎士」、穏やかに話を進めつつも正教徒であるという点において「伯爵」とは異なる思想を持つ「議員」、このふたりと「伯爵」との鼎立によって『夜話』では様々な議論が展開されてゆく。ただし『夜話』の中では「騎士」が鼎談を書き記そうと思いついたことになっているが³、実際にはメーストル（作中では「伯爵」に当たる）が 10 年以上に亘って書き続けた末、ついに完成を見ぬまま 1821 年の没後まもなく出版されたものである。

こうした回りくどい仕掛は、はじめのうちはさほど問題にならない。『夜話』の鼎談の大部分において主たる話者は「伯爵」であり、「騎士」は質問役、「議員」は相槌役として、ほとんど「伯爵」の議論の進行を促しているにすぎないからだ。ところが最終 2 話、すなわち第 10 話と第 11 話において、それまでの話から一歩進んで、来たるべき再統合とはどのようなものであるかを論じる段になって、「伯爵」の歯切れは悪くなり、「議員」の逞しい夢想を押し留めようとするばかりとなる。未完に終わった『夜話』の結論部における、さらに言えばメーストルの思想そのものの結論を出そうとするにあたっての、この逡巡は何だろうか。これが本論での問題となる。

したがって本論では、はじめに『考察』における反革命の概念を整理し、次に『夜話』で述べられる神学および言語をめぐる思想を概観したのち、『夜話』の最終 2 話で展開される議論を詳しく見てゆくこととする。

1. 政治：『フランスについての考察』における反革命の概念

『考察』では、メーストルの政治思想において最も重要な「反革命」という概念が提起される。反革命とは何か。メーストルによる定義は、きわめて簡潔である。

¹ メーストルには、新刊で入手できる選集 *Joseph de Maistre : Œuvres*, Pierre Glaudes (dir.), Paris, Robert Laffont, 2007 と、オンラインで参照可能な全集 *Œuvres complètes de Joseph de Maistre*, Lyon, Vité et Perrussel, 1884-1886, 14 vol.がある。本論では、どちらにも収録されている作品については双方の出典を選集、全集の順で JM ; OC と記す。たとえばこの箇所は *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 455 ; OC t. 4, p. 1.

² « Notes sur *Soirées de Saint-Petersbourg* », JM pp. 983-984.

³ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 685 ; OC t. 5, p. 75.

いわゆる反=革命とは、逆方向の革命ではなく、革命の反対であるものなのだ⁴。

メーストルが『考察』を執筆していた 1796 年は、ロベスピエールさえ断頭台に送られた後である。華々しく始まった革命は早々に破綻し、しかも失敗に終わったのですらない、先の見えない無秩序状態として迷走を続けていた。摂理による来たるべき反革命を説くのは、人間の理性のみによる秩序の構築は不可能だという指摘であるが、今さら革命以前の状態に戻ることはできないという認識を示してもいる。そのことは 1794 年の書簡からも読み取れる。

これを認めるのは勇気があるのですが、わたしたちは長いこと革命に居合わせながら、全く理解していませんでした。長いこと革命を単なる事件だと思っていたのです。それは間違いでした。革命は時代を画す出来事なのです⁵。

革命もまた歴史なのだ。もはや革命派の理念など関係なく、フランス革命によって歴史が動かされている以上、何らかの摂理に関わる出来事だと考えるしかない。これが、フランス革命に対する肯定、崇高なものとしての受容である。メーストルは革命のうちに、時を作り出す力を見ている。

疑いようもないことだが、革命の初期状態が宣言されたからには、革命を妨げる術などなく、誰にも止めようがない⁶。

こうした時間感覚は全く反近代的でない、それどころか近代の特徴に他ならない。確かにメーストルは、ある部分では近代主義者であって、一方通行の歴史という革命の生み出した時間感覚からは逃れられない。ただ、それを進歩や発展ではなく墮落や混迷と捉える。捉えるというより、まさに時代がそうだったのだ。しかし、どうして人間の始めた革命が人間を苦しめ、摂理の顕現となり、時代を画すのか。

フランス革命を特徴づけ、歴史的に特異な出来事とするのは、それが根源的な悪だということである。観察者の目を和ませる良い要素は何もない。フランス革命は知られうる限り最も甚だしい墮落であり、純然たる不純物なのだ⁷。

⁴ *Considérations sur la France*, JM p. 276 ; OC t. 1, p. 157. 傍点は原文イタリック、以下同様。

⁵ « Discours à Mme la marquise de Costa sur la vie et la mort de son fils Alexis-Louis-Eugène de Costa », OC t. 7, p. 273.

⁶ *Considérations sur la France*, JM p. 200 ; OC t. 1, p. 4.

人間は理性によって秩序から逸脱するばかりだ、というのがメーストルの革命観である。したがって、この悪とは人間の自由意志による行為であって、神に由来するものではない。そのことは次のように説明される。

悪は存在と共通するものが何もない。悪には創造ができない、悪の力は全く否定的だからだ。悪とは存在の裂け自なのだ、悪は実在しない⁸。

しかし、それでも人間の自由な行為から普遍的な秩序がもたらされるというのが、摂理による反革命である。これは奇妙な論理であり、実際、未だ到来しない反革命について論じた『考察』の末尾である第11章は、エピグラフにベルヌーイの墓碑銘「わたしは蘇る、変化して、しかし同じものとして」を掲げ⁹、ヒュームの『イングランド史』からの引用を羅列したあと、閉じられないままに終わる、何とも異様な章となっている。

これが精神の普遍的な顛末なのだ、それはいつかというところ……

残りは欠けている¹⁰

まさに反革命なる概念の難所だが、これは人間の自由意志を擁護し、機会原因論を退けるための論理である。メーストルの自由意志へのこだわりは、『考察』に先立つ『ルソーの著した不平等状態に関する本について』において、端的に示されている。

実際、いかなる発端の意図も存在しないとすれば、そして存在するものが全て盲目的因果律の連鎖の帰結に過ぎないとすれば、すべては必然である。すなわち選択も倫理も善も悪もない¹¹。

題名の示唆するとおりルソー批判の著作だが、人間の本性についてメーストルはルソーと同じ認識を持っている。人間だけが自由意志という形で悪への傾きを持つ、その意志と行動こそが根源的な乱調であり、時代を駆動する原罪なのだ。人間が原罪として構想力を持っていることは、否定すべき性質

⁷ *Ibid.*, JM p. 224 ; OC t. 1, pp. 50-51.

⁸ *Ibid.*

⁹ *Ibid.*, JM p. 276 ; OC t. 1, p. 158. 対数螺旋を拡大・縮小すると自身と一致するという相似性を、歴史になぞらえている。

¹⁰ *Ibid.*, JM p. 288 ; OC t. 1, p. 181.

¹¹ *Examen d'un écrit de J.-J. Rousseau sur l'inégalité des conditions*, OC t. 7, p. 530.

ではない。メーストルが『考察』において珍しく人間による立法を好意的に語る時、重視されているのは間歇性である。

オウィディウスが周期的に休まないものは長続きしないと述べたとき、彼は第一級の真実を語っていた。もし完全性が人間の本质につきものであれば、立法者は一度だけ話せばよい。しかし、われわれの作るものがすべて不完全であり、政治体制が腐敗してゆくに応じて主権は新しい法律によって助けを得なければならぬとして、それでも人間による立法は、今しがた話したような間歇性によって、その模範に近づける¹²。

人間の為すことは全て恣意的で根拠がなく、つまりは間違っている。人為の産物は理性の限界を超えることができず、つまりは不完全である。それでも人間は、断続的な試行と錯誤によって、時代とともに変化してゆく。人間の自由意志を悪と看做す原罪意識と、それによって時代が漸進するという歴史認識、これがメーストルのいう反革命の特徴である。

2-1. 神学：『聖ペテルブルク夜話』における可換性の原理

人間の原罪は『考察』においては歴史の駆動力とされた。いっぽう『夜話』において原罪は、個々の人間の集まりが全体性を持ちうる契機として、また別の重要性を帯びる。『夜話』の主題は極めて明確、冒頭で「騎士」から提起される、どうして現世では悪人が栄えて義人が苦しんでいるのか、という問いである。その回答に、メーストルの原罪意識を表わす格言として引用されることの多い一節が、程なく「伯爵」から示される。

人間は皆、人間として、あらゆる人間的な不幸を被りうる¹³。

結論そのものは第1話にして早々に出ているのだ。したがって『夜話』では、どうして人間は全体として不幸を被るのか、何の罪に対する罰なのかの問題となる。既に『考察』のうちに、悪は神に由来せず、人間の自由意志による行為であると述べられていたが、これは『夜話』では論じるまでもない真実として「伯爵」によって提示され、すぐさま「議員」が言葉を継ぐ。

¹² *Considérations sur la France*, JM p. 236 ; OC t. 1, p. 76.

¹³ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 467 ; OC t. 4, p. 26.

いかなる意味でも、神は倫理的な悪、つまり罪の作者ではないでしょう。のみならず、物質的な悪の根源的な作者であるとも思えない、それは知恵を持った被造物が自由を濫用して為さなければ存在しなかったものでしょう¹⁴。

この罪とは、絶えず反復される原罪なのだ。「伯爵」は言う。

全てを説明し、それなくしては何も説明できない原罪は、たとえ二次的な表われ方だとしても、継続する各瞬間ごとに、不幸にも繰り返されているのです¹⁵。

この論理では、暗黙裡に人間全体がひとつの有機体と看做されている。個々の人間が罪を犯したり罰を受けたり、どちらか一方のみであったりするの、問題でないのだ。こうして、『夜話』の前半（第1話～第7話）を振り返って要約する第8話において、メーストルの神学で最も重要な「可換性」という概念が「伯爵」の口から提示される。

義人が進んで苦しむとき、彼自身だけでなく、可換性によって罪人をも満足させる¹⁶。

続く第9話の冒頭で「伯爵」は、参照すべき本として匿名作者による『フランスについての考察』なる本（もちろん本当の作者はメーストル自身である）を挙げ、抜粋を「騎士」に読ませる。

こうした考察の間じゅう、無辜の者が罪人とともに死ぬ、といううんざりする情景に悩まされ続けてきたことは、よく知っている。しかし、この問題は最も深遠なものに起因しており、深入りせずとも、罪人のための無辜の者による苦しみの可換性という、世界それ自体と同じだけ古くからある普遍的な教理との関係においてのみ、考えることができる¹⁷。

『考察』においては、この箇所¹⁸にしか出てこない「可換性」という概念（少なくとも *réversibilité* という単語は一回しか登場しない）が、『夜話』の末尾の数話においては重要な主題となる。さらに第10話の冒頭で、前夜「伯爵」から聞かされた可換性の理論について、「議員」はこう要約する。

¹⁴ *Ibid.*, JM p. 466 ; OC t. 4, pp. 22-23.

¹⁵ *Ibid.*, JM p. 485 ; OC t. 4, p. 61.

¹⁶ *Ibid.*, JM p. 693 ; OC t. 5, p. 90.

¹⁷ *Ibid.*, JM p. 708 ; OC t. 5, p. 122.

¹⁸ *Considérations sur la France*, JM pp. 217-218 ; OC t. 1, p. 38.

世界について考察するほどに、悪とは何だか分からぬ分裂から生じたもので、善への帰還は、これも想像できないような一体性へと絶えずわれわれを押しやる力に依るのだ、と信じたくなるのを感じるでしょう。功德の共同体、あなたが十分に証明された可換性は、われわれの理解していない、この一体性のみに由来するのでしょう¹⁹。

ここで「議員」は、可換性を一体性へと転化している。可換性の論理を翻案し、悪とは分裂であり善とは一体性である、という考えを導入したのだ。

「伯爵」が主に摂理との関係において、つまり人間の神との結びつきから論じていたのに対し、「議員」は人間どうしを結びつけるものとして考える。

革命の惨禍を目にした衝撃から出発したメーストルの思想は、神と人間とを、さらに人間どうしをも結びつける魂柱として、いかなる時代や場所にも犠牲の論理が働いていることを基底に据え、罪に対する罰は個人ではなく全体に及ぶとし、その「苦しみの可換性」こそ人間を「功德の共同体」たらしめている、という結論に達した。こうして人間は、通時的にも共時的にも、現世においても摂理との繋がりにおいても、一体となった。これが『夜話』において展開される神学的な議論である。

2-2. 言語：『聖ペテルブルク夜話』における奇妙な造語論

ところで、人間の罪と罰をめぐる神学的な議論と並んで、『夜話』は随所で言語についての議論が交わされる。その発端は、第2話で「伯爵」が「自分の言うことを聞かせられる力のないひとりの人間にも、互いに理解し合えない大勢の人間たちにも、言語を発明することはできません²⁰」と言うとおり、人間が自らに全体的な秩序を与えることはできないという『考察』で政体について述べられていた認識を、そのまま言語にも当てはめたものである。

言葉について言える最上のこと、それは自らを「言葉」と呼ぶ者について言われたことに他なりません。それはあらゆる時間に先立って自らの本源から現われる。それは永遠と同じくらい古くより存在する……。その根源について誰が語れるというのか？²¹

¹⁹ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 728 ; OC t. 5, p. 162.

²⁰ *Ibid.*, JM p. 497 ; OC t. 4, p. 87.

²¹ *Ibid.* 「」と傍点をともに附した単語は、原文では全て大文字で書かれている。以下同様。なお後半の傍点部（原文イタリック）はミカ 5:2、イザヤ 53:8 に基づく。

神から言語を与えられた、人間より前に言語があったとすれば、より始原に近い古代のほうが本質的に正しい言語だったことになる。それを「伯爵」は、とくに贖罪にかかわる単語を挙げて述べる。

古代ローマ人たちは、戦争と耕作しか知らないような時代に、どうして祈りと苦しみという概念を同じ言葉で表わそうと思ったのでしょうか？ 誰が彼らに熱病のことを浄化とか贖罪とか言うよう教えたのでしょうか？ そこには、名づけの正しさを裏打ちできる判断力が、つまり物事についての真の知識が、存在すると言えないでしょうか？²²

ところが「伯爵」の天賦言語論は、しだいに奇妙な造語論へと進んでゆく。古代人の「名づけの正しさを裏打ちできる判断力」を称えたのちに述べられるのは、古代言語における「言語を作る一般規則」である。

ラテン語は、ギリシャ語よりも手ごわいですが、いうなれば単語を「壊す」のです。そして、その切片を選んで、何か実に独特な「膠着」の方法でもって繋ぎ合わせ、驚くべき美しさの新語を生み出し、もとの要素は識者の目にも判別しがたいものとなるのです²³。

理屈は分からなくもないが、例を見ると面喰ってしまう。

たとえば CAro [肉]、DAta [与える]、VERmibus [蛆] の3語から、CADAVER [屍]、蛆に委ねられた肉という単語ができます²⁴。

長くなるので引用しないが、以下この種のラテン語の造語例が幾つも羅列され、さらにフランス語についても同様の例が並べ立てられる。「伯爵」は、コンディヤックの見解を拝借する形で「言語は知らず知らずのうちに自らを形づくり、各々の人間もそれに貢献している²⁵」と説き、現代においても言語を作り上げる営みは続けられているという。

さまざまな言葉を作り上げる、いわば隠れた原理が働くのを目撃するのは、愉快なことです。ときにわれわれは、それが途中で出くわす困難と格闘しているのを目にします。その働きは、自身の持っていない形態を探し求め、手にして

²² *Ibid.*, JM p. 498 ; OC t. 4, p. 90.

²³ *Ibid.*, JM p. 499 ; OC t. 4, p. 91.

²⁴ *Ibid.* □ は訳註、以下同様。

²⁵ *Ibid.*, JM p. 497 ; OC t. 4, pp. 87-88.

いる素材に抵抗されます。そして幸福なる破格によって困難を切り抜け、上手いこと言っているのです²⁶。

現に革命が起こっている以上、そこに何らかの意味を見出さざるを得ず、したがって革命とは人知を超えた摂理の顕現である。同じように、現に言語の破格が起こっている以上、それは「隠れた原理」による「幸福なる破格」なのだ。いつの間にか全面的に言語論を展開することとなった第2話を、「伯爵」はこのように締めくくる。

あらゆることが告げているのは、宗教的な言い回しをすれば、われわれは遠くから拝むしかない大いなる統一へと進んでいるということです。われわれは痛ましく、しかし全く正当に、粉碎されるのです。けれども、わたしのような取るに足らない目にも隠れた摂理を垣間見させてもらえるとすれば、われわれは混ざり合うためにこそ挽かれるのです²⁷。

この喩えは、先に「伯爵」の列挙した *cadaver* その他の造語法、単語を壊してから膠着させるという新語の生成法と一致している。粉碎されてこそ大いなる統一へ進めるという考えが、言語観において表われたのが、奇妙な造語論なのだ。

3-1. バベルとペンテコステ

ここまで『夜話』の重要な論題ふたつについて見てきた。人間による自由の濫用という「継続する各瞬間ごとに、不幸にも繰り返されている」原罪と、その罰として「人間は皆、人間として、あらゆる人間的な不幸を被りうる」という「苦しみの可換性」は、「世界それ自体と同じだけ古くからある普遍的な教理」であり、人間を「功德の共同体」たらしめている。「永遠と同じくらい古くより存在する」言語は、「幸福なる破格によって困難を切り抜け」、自己同一性を保ちながら「知らず知らずのうちに自らを形づくり、各々の人間もそれに貢献している」。悪も言語も人間による営みであり、いずれも同じものが形を変えて繰り返され、それを各々の時代や場所で分有することで、人間どうしを、また神と人間とを結びつけ、普遍的な秩序となっている。

²⁶ *Ibid.*, JM p. 500-501 ; OC t. 4, pp. 94-95.

²⁷ *Ibid.*, JM p. 517 ; OC t. 4, p. 127.

ところが『夜話』は終盤になって雲行が変わってくる。冒頭から話を主導してきたのは「伯爵」だった。立場も意見も違う「議員」や「騎士」が議論を戦わせることはなく、ほぼ「伯爵」に説得されるのみであった。しかし『夜話』の最後、第10話と第11話を主導するのは「議員」なのだ。といって、第10話で「議員」は「伯爵」と真っ向から対立するのではない。「伯爵」が十分に説明しなかった可換性の教理を、確かに理解する性質のものではないと認めつつ、多少なりとも掘り下げられないかと言っているだけだからだ。

可換性の理論は、字義どおり先天的真実と看做せるような、人間にとって自然のものであると考えます、というのも、われわれはそれを習うことができないからです。しかし、この普遍的教理の意味を発見したり、せめて半解したりすることも不可能だと思われませんか？²⁸

既に引いた「悪とは何だか分からぬ分裂から生じたもので、善への帰還は、これも想像できないような一体性へと絶えずわれわれを押しやる力に依るのだ」という一節も、そこから導かれたものだ。これも、悪とは人間による神からの離反であるという、既に「伯爵」が述べていたことの言い換えであって、とくに問題ないように思われる。ところが「伯爵」は、そうした「議員」に対し、それ以上は深入りしないよう懇懇に諫める。これまでの雄弁とは打って変わって、「伯爵」は無知の必要性を強調する。

この教理の意味を見抜こうとすると、あなたは信仰の価値を失うことになりま
す、それは全く無益であるどころか、あなたにとって非常に危険です²⁹。

メーストルは、政体について論じるとき、しばしば同様のことを書いていた。たとえば最も初期の文章『サヴォワの王党主義者から同胞への手紙』には、このような一節が見られる。

子どもは、内部の機械仕掛によって子どもには分からぬ動きをするおもちゃを与えられると、しばらく遊んだあと、壊して中を見ようとする。同じことをフランス人は政府に対して行なった。中を見ようとし、政治の原理を剥き出しにし、それまで大衆が観察したいと思ってもいかなかったことに対して目を開かせた、そうやって衆目に晒されると壊れるものがあるとは考えなかったのだ³⁰。

²⁸ *Ibid.*, JM p. 728 ; OC t. 5, p. 162.

²⁹ *Ibid.*, JM p. 742 ; OC t. 5, pp. 189-190.

³⁰ *Lettres d'un royaliste savoisien à ses compatriotes*, OC t. 7, p. 38.

秩序の根本には不可知なものがあり、いたずらに解明しようとすべきでない、という立場は一貫している。では「議員」は、何に踏み込みすぎてしまったのか。第10話をとおして「議員」は、分裂と再統合という考えを幾つもの比喩で繰り返し、最終的に到来するであろう一体性を夢想する。

たとえば和合という言葉は愛情も意味しますし、愛情という言葉もまた和合した状態のみを意味します。愛着（あるいは同じ感情から作られた他の言葉）の証は、物理的な和合です。手を取り合い、抱擁します。口は言葉の道具であり、言葉もまた知性の道具であり表現であるから、人間の口ふたつが近づくことには、ふたつの魂が溶け合う予兆を示す何らかの聖なるものが宿ると、皆が信じたのです³¹。

確かに突飛な喩えではある。接吻の快樂が一体性への兆しなのだろうか。メーストルの著作において、こうした情愛についての言及は他に思い当たらないだけに、いっそう特異に思われる。ただ「議員」は、肉体的な官能を述べているのではなく、口が知性にかかわる器官だから、と言っているの、それなりに「伯爵」の議論を踏まえてはいる。

わたしは、現世の狭苦しい限界の外へ飛び出したくなることがあります。啓示の日を先取りし、無限の中に飛び込みたいのです。人間のふたつの法が消し去られ、ふたつの中心がひとつになるとき、人間は「ひとつ」になるでしょう。というのも、もはや人間のうちに争いが無いのに、どこで二なる性質を得るのですか？ けれども、もしわれわれが人間を他者に相対する者として考えるのであれば、悪がなくなって、個人的な情念も利害もなくなったとき、人間はどうなるのでしょうか？ あらゆる思考が欲望のように共通のものとなり、あらゆる精神が他人から見られているように自身を見られるようになったら、「わたし」はどうなるのでしょうか？ すべての住人が同一の精神に充たされ、互いに浸透し、幸福を映し合う、このような天国を誰が理解し想像できるのでしょうか³²。

ここには期待と不安が入り混じっており、再統合なるものがどういう状態なのか、分裂していた個は再統合された一体性の中ではどうなるのか、という疑問が提示される。それを別の比喩で述べたのが、次の一節だ。

人間は、同じ食事をとる、つまり寄り合って食事をとるために集まること以上に明白な団結の証を持っていません。この証は、団結を一体性にまで高めるか

³¹ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 732 ; OC t. 5, p. 169.

³² *Ibid.*, JM p. 733 ; OC t. 5, p. 172.

のようです。この感覚は普遍的であり、宗教はそれを重要な玄義の基礎としました。普遍的な本能に基づく全ての食事が同じ杯による親交 *communion* であるように、宗教のほうでは聖体拝領 *communion* を食事としました。肉体的な生にとってと同様、精神的な生にとっても、糧が必要なのです。同じ物質的な装置が、どちらにも使われます。宴会では、皆にとって唯一かつ全体である食事によって、皆が「一」となります。昔の教父たちは、この一体性の中での変化を分かち得るため、不思議な素材である穂と房を好んで喩えに使いました。麦や葡萄の沢山の粒がひとつのパンや酒となり、その聖卓で出されるパンとワインは「わたし」を砕き、われわれを途方もない一体性に浸すのです³³。

これは論理においては「伯爵」と同じで、あらゆる人間集団に見られる慣習こそ真実の表われであり、それをカトリックが最も適切に抽出して教義としている、という考えだ。穂と房、パンとワインの喩えも、「伯爵」の述べた「われわれは混ざり合うためにこそ挽かれるのです」という箴言と、そう変わるものではない。こうして見ると「議員」は、「伯爵」の灰めかす来たるべき一体性なる状態を、より具体的に描こうとしていることが分かる。

分裂と再統合を経たのちに至るという「途方もない一体性」とは何なのか。それは未だ到来していないのだから説明不可能だろうというのが「伯爵」の立場だ。未だ到来しない反革命について論じた『考察』の末尾が、閉じられないままに終わっていたことを思い起こさせる。だが『夜話』の第10話で「議員」は、「せめて半解したり」しようとする。その第10話において、「議員」の発言で最も重要なのは、次の一文である。

精神世界において最も重大な時期は、言語が分裂したバベルの時期と、言語を再統合しようと見事な努力が行なわれたペンテコステの時期でしょう³⁴。

3-2. 翻訳共同体

こうして言語をめぐる旧約聖書と新約聖書それぞれの逸話が提示されたのち、『考察』と同じく未完のままに終わった『夜話』の最終話では、言語の分裂と再統合が主題となる。さらに第11話の最後では「伯爵」が「議員」に説得されかけるといふ不思議なことが起こっている。会話においても「伯爵」と「議員」の分裂と再統合が為されようとしているのだ。といって、完全な

³³ *Ibid.*, JM p. 735 ; OC t. 5, pp. 175-176.

³⁴ *Ibid.*, JM p. 731 ; OC t. 5, p. 168.

合意には至らないので、「議員」の意見をメーストルの見解と看做せるかはなお留保が必要だが、ともかく第 11 話の最後、「伯爵」の台詞を見てみよう。

ともかく、あなたもご存じでしょう、わたしが聖書協会の中に散在する誠実さをどれほど正当に評価しているか、とりわけ何人かの守護者の偉大な名前を敬っているか！ この尊敬は、今わたしたちが話している主題について、わたし自身に反して立論するとき、妥協できない論理と妥協する方法があるのではないかと思われ、しばしばわたしを驚かせます。ですから考えてみてください、もしわたしが、慰めの精神とは切り離された、宗教を喜ばせるのではなく怯えさせる企てによる、予言的に遠い結果を見せてくれる、あなたの見事で全く新しい視点を、昂奮とともに支持するとしたら……

残りは欠けている³⁵

またしても「残りは欠けている」のだが、聖書協会について否定的であった「伯爵」が、「議員」の言うとおりの肯定的に考えてもよいのではないかと逡巡する台詞の途中で終わっている。

聖書協会とは、プロテスタントの原理に基づき、教会の権威なしに聖書を読めるよう、聖書を翻訳し頒布している団体である。カトリックからすると認めがたいことだ。「伯爵」の最後の台詞でも、適切な解説なしに聖書を読んではいけないと、きちんと述べている。

穏やかな鳩が、はじめは穀粒を飲み込み、それから少し碎いて雛たちに与えるというのが、書かれた言葉を手に届く範囲に置いてから忠実に説明する教会についての自然な比喻です。註釈や説明なしに聖書を読んだら聖書は毒です。聖書協会はプロテスタントの仕業であり、それゆえ、あなたもわたしと同じように聖書協会を糾弾せねばなりません³⁶。

では「伯爵」は、何に納得して、聖書協会を認めてもよいと思ったのか。先立つ「議員」の弁はこうだ。

エジプトの王（それが誰であるか、いつの時代であるかは知りません）が聖書をギリシャ語に訳させたとき、彼は自分の好奇心か慈善事業か政治方針を満足させたのでしょう。この敬うべき法が謂わば全民族に差し出され、モーセからエレアザールまで完全な形で伝えられていた聖なる固有語だけで話されることを止めたのを、真のユダヤ教徒がとても不愉快に思ったことは、異論の余地は

³⁵ *Ibid.*, JM p. 775; OC t. 5, p. 257.

³⁶ *Ibid.*, JM p. 774; OC t. 5, p. 255.

ありません。しかしキリスト教が現われ、聖書の翻訳者は聖書を普遍言語に移したことでキリスト教の役に立ちました。使徒たちと初期の継承者たちが、できあがった翻訳を見つけたのです。すぐに 70 人訳聖書があらゆる教壇に上り、それを原典として当時の生きた言語に訳されたのです³⁷。

ファラオの命令によって旧約聖書をヘブライ語からギリシア語に訳した 70 人訳聖書が、のちに現われるキリスト教にとっての原典となった。これは確かに尤もである。同じことが、いま聖書協会の行なっている翻訳から将来もたらされるはずだ、という。

現代においても同じことが違う形で見られます。ローマは聖書協会に耐えられないでしょう、これほどキリスト教に反する機関はないと思っているからです。しかし、警戒しすぎないとよいのですが、仮に聖書協会が自分のしていることを分かっていないとして、それでも、かつて 70 人訳聖書がしたのと全く同じことを未来においてするだけです。70 人訳聖書はキリスト教を全く予期しておらず、しかしキリスト教はその翻訳に多くを負っているのです³⁸。

カトリックさえ越えた普遍性を「議員」は予告するのだ。「伯爵」が戸惑うのも無理はない。しかし、先に「議員」の挙げた「ペンテコステ」は、まさしく翻訳のもたらす普遍性を示した逸話ではなかったか。

言語は意思疎通の道具である。言語が同一ならば意思疎通は容易で、全人類の協働作業も可能となろう。では言語がひとつしかなかったとき、人間は何を企てたか。天に至る塔を建てて神に挑戦しようとしたのだ。それを見た神は言語を分裂させ、塔を作れなくさせた。これが創世記の第 11 章に書かれたバベルの逸話である。人間には神に叛こうとする悪しき性向があるため、人間どうしの円滑な意思疎通は、墮落を早めたただけであった。

他方、使徒行伝の第 2 章に書かれたペンテコステの逸話はどうか。五旬節の日に信徒が集まっていると、炎のような舌が分かれて各々の上に現われ、他国の言葉を喋るようになった。五旬節のために各国からエルサレムに来ていた離散ユダヤ人たちは、信徒たちが各国の言語で喋っているのを見て驚いた。そこでペテロがイエスの死と復活について説き、多くの聴衆が洗礼を受けて信徒に加わった。これが、新約聖書に書かれた言語の再統合である。

ペンテコステでは、バベル以前の単一の言語が回復されたのではなく、それぞれが違う言語（話し相手の言語）を喋ることによって意思疎通できると

³⁷ *Ibid.*, JM p. 769 ; OC t. 5, p. 246.

³⁸ *Ibid.*

いう、別の普遍性が想定されている。個別性を保持したまま普遍性に至るのだ。人間が「ひとつ」になるとき、「わたし」も消えてしまうのではないか、という「議員」の不安に対する、一定の回答であろう。加えて、70人訳聖書の話は、聖書とは翻訳が原典であるという奇妙な状況を露わにしており、戻るべき起源など存在しないことを示唆してもいる。逆向きの翻訳というものは、再翻訳しても原文が復元されるわけではなく、かえってかけ離れてしまう。『考察』において反革命は逆方向の革命ではないと何度も力説していたことが思い出される。既に言語が分裂してしまったのであれば、翻訳を進めることでしか再統合はありえない。それゆえ、キリスト教の秩序を破壊するかに見えるプロテスタントの聖書翻訳という「宗教を喜ばせるのではなく怯えさせる企て」が、「予言的に遠い結果を見せてくれる」のだ。

聖書協会は、聖書の翻訳によって「一体性の恐るべき敵が、一体性を打ち立てるために働いている³⁹」と「議員」は言う。こうした逆説は『考察』における革命観と一致する。「盲目な反体制派が共和国の不可分性を宣言したとき、それは実は神が王国の不可分性を宣告したに他ならない⁴⁰」

秩序を破壊する革命が、じつはフランスの一体性を守っていた。これは確かにそのとおりで、王党派が同盟により他国の軍事力に頼って革命派を倒そうとするのは他国に侵略の口実を与えるもので、それを革命派が押し返すことでフランスは守られた。メーストルは革命下で様々な逆説の噴出を目撃し、そのために革命は人智を超えた摂理の顕現であると捉えたのだった。

フランス革命が結局どうなるのか知りたければ、すべての過激派たちが何において一致しているか観察すればよい。彼らは皆、普遍的キリスト教と君主制を貶め、さらには破壊しようとしている。その結果として、彼らの努力はすべて、キリスト教と君主制の称賛にしかならない⁴¹。

それゆえ「伯爵」は、遠大な「議員」の夢想を支持しようと思えたのだろう。『夜話』において「議員」から提起されるバベルとペンテコステの逸話、そして未完の第11話の結末において聖書協会に託される一縷の望みは、メーストルが『考察』において述べていた、革命に引き続いて起こるはずの来たるべき反革命とは、革命以前への復帰ではなく、啓示的な出来事による新たな秩序の創出である、という考え方の、神学的な変奏なのだ。

³⁹ *Ibid.*, JM p. 770 ; OC t. 5, p. 247.

⁴⁰ *Considérations sur la France*, JM p. 209 ; OC t. 1, p. 21.

⁴¹ *Ibid.*, JM p. 256 ; OC t. 1, p. 117.

3-3. 国家の文明化

メーストルは、フランス語の優位ばかり信じていたのではなく、その著作における膨大な引用から分かるとおおりラテン語もギリシャ語も英語も解し、そうした書物を若い頃から濫読していた熱心な勉強家であった⁴²。フランス語圏の外、もっと言えばキリスト教圏の外にも好奇心を抱いていたのだ。「伯爵」は、言語論を述べていた第2話で、他言語との出会いについて少しだけ触れている。ペテルブルクの図書館で漢羅辞典を読んだというのだ。これはメーストル自身の経験談と考えてよいだろう。

人間の混淆が目を見張るものであれば、言語の交通もそれに劣りません。かつてわたしは、この街の学士院の図書館を訪ね、バイエルの『中国事典』という、今では貴重となった本、そしてロシアの所有している本、というのは著者は80年前にペテルブルクで本を刷ったからですが、を読んだことがあります。わたしはこの博識で敬虔な著者の研究に感心しました。本には「この言語についての著作が何の役に立つのか、まだ分からないが、すぐに分かるだろう。2世紀前にはヨーロッパで全く知られていなかった言語が、今では全世界で知られるようになったというのは、摂理の意志に他なるまい。摂理の意志というものには疑いが向けられるようになってきているが、その疑いを全力で晴らすのが、われわれの責務である」とあります。いまバイエルが生きていたら何と言うでしょう？ 摂理の働きが加速しているように感じられることでしょう⁴³。

バイエルの『中国事典』は1730年の本だが⁴⁴、中国語の文法がラテン語で解説され、孔子の『大学』が漢字一文字にラテン語一単語を当てる形で逐語訳され、平仄や崩し字についても書かれている。漢字圏の者から見れば不正確な部分も多いが、それだけにいっそう、ラテン語圏の学識者が漢字という未知の文字から受けた衝撃と解説のための苦闘を推し量ることができる。

しかし、言語は民族あるいは国家と密接に関係していたはずだ。メーストルは『主権原論』の第10章で「国民精神」の重要性を説き⁴⁵、『考察』の第6章では何らかの国民でない人間など存在しないと述べていた⁴⁶ではなかったか。言語において一体化が起こるとしたら、国家や国民精神はどうなる

⁴² G. Valbert (Victor Cherbuliez), « La jeunesse de Joseph de Maistre, d'après une publication récente » dans *Revue des Deux Mondes*, 1er juillet 1893 (3e période, t. 118), p. 219.

⁴³ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 516 ; OC t. 4, pp. 124-125.

⁴⁴ Theophil Siegfried Bayer, *Museum Sinicum in quo Sinicae Linguae et Litteraturae ratio explicatur*, 2 vol., Petropoli, Ex Typographia Academiae Imperatoriae, 1730.

⁴⁵ *Etude sur la souveraineté*, OC t. 1, pp. 375-378.

⁴⁶ *Considérations sur la France*, JM p. 235 ; OC t. 1, p. 74.

のだろう。あらゆる国家が、共存するにせよ融合するにせよ、何らかの形で統合され、すべての人間が所属する共同体が生まれるのだろうか。

国家よりも上位の統一という概念を、じつは「議員」は第7話で微かに提起していた。

国家が個々人と同じような社会状態へと至れないのは何故なのか？ とりわけ理性的なヨーロッパがこのような試みを行なわなかったのはどうしてか？ この問いは敬虔な信仰者にこそ投げかけたい。どうして個々人の間に社会を作った神が、その大切な被造物であり改善力という神聖な性質を持つ人間に、国家の間に社会を作ろうと試みるに至ることを許さなかったのでしょうか？⁴⁷

人間は一体化への性向を持っているのに、どうして最終的な一体化に至らないのか。こうした「議員」の疑問は尤もなのだが、続けて「何か見えない恐ろしい法が人間の血を欲しているというのでもなければ、こうした試みが為されないことに、わたしは納得できません⁴⁸」と言ったため、話題は戦争と摂理に移ってしまう。ただ、その前に「伯爵」は一言、「国家の文明化」は何度も試みられたが失敗したのだ、と述べる。

あなたは、国家の文明化は未だ試みられたことがない、というのを間違いない事実と考えておられる。しかし本当のところ、それはしばしば試みられた、むしろ執拗に試みられたのです、ところが実際には、何をしているのか分からず、好機であったのも分からなかったのです、ほとんど成功しそうで、われわれの本質にある不完全性がそれを認めさえすればよかったのです。しかし人間は失敗しました。人間はあるものを別のものと取り違え、全ては失敗したのです、どう見ても、あなたの言われたような見えない恐ろしい法のせい⁴⁹。

『考察』において述べられていた、人間による立法の不完全性と間歇性を思い出してみよう。人間は全能ではないから、人間による立法は必然的に不完全である。しかし、絶えず新しい立法を続けるという間歇性によって、その模範に近づける。これがメーストルの政体についての見解であった。

類推的に「国家の文明化」について考えてみる。われわれの本質にある不完全性が、「国家の文明化」がほとんど成功しそうであることを認めさえすれば、それでよかった。ところが、ほとんど成功しそうであることを成功そ

⁴⁷ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM pp. 654-655 ; OC t. 5, p. 13.

⁴⁸ *Ibid.*, JM p. 655 ; OC t. 5, p. 14.

⁴⁹ *Ibid.*, JM p. 655 ; OC t. 5, p. 14.

のものと取り違えた結果、全ては失敗に終わった。つまり、逆説的であるが、人間による「国家の文明化」は決して完全なものにならないことを認めてはじめて、ほとんど成功したという状態に至れるのだ。

永遠に未完の「国家の文明化」とは何か。言語論に立ち戻れば、来たるべきペンテコステ、すなわち誰もが互いに相手の言葉を喋るという状態である。バイエルは『中国事典』で、言語の交通は摂理の表われだと述べていたのだった。そして「摂理の意志というものには疑いが向けられるようになっているが、その疑いを全力で晴らすのが、われわれの責務である」と言うとき、「われわれの責務」とは直接的には『中国事典』を指すが、より広義には翻訳の試みだろう。このバイエルの見解には「伯爵」も同意していた。翻訳を推し進めることで全世界的な一体化を目指すのであれば、確かに「人間を他者に相対する者として考えて」いながら、つまり「わたし」が霧散しないままに、人間は「ひとつ」になれるだろう。

だが、それは到達不可能な状態でもある。理由はふたつある。第一に、言語どうしは一対一対応しないので、正確な翻訳はできないからだ。第2話で「伯爵」は、言語は認識の枠組に対応しており、それぞれの民族で認識の枠組が違うのだから、ある事柄を表わす単語が全ての言語に等しく存在するわけではないことを指摘している。

確かなことは、人間は常に喋ってきたということ、それから、人間の喋ってきたことは、どれだけ人間が考えたか、どれだけよく考えたかに正確に比例することです。なぜなら、存在しない思考に対する記号がある、あるいは自分を表わすための記号を持たない思考がある、と信じるのは馬鹿げているからです。たとえばヒューロン族〔北アメリカの先住民族〕が時計とは言わないでしょう、そのような単語は彼らの言語にないはずですが、けれどもトマホーク〔ヒューロン族が使う斧〕という単語は幸運にもわれわれの言語にはない、しかし時計と同じくらい重要なのでしょう⁵⁰。

第二に、ペンテコステがそうであったように、翻訳は布教と密接に結びついているが、全世界に布教が行き渡るのには到底ありえないことだからだ。ヨーロッパの外に広漠な世界が存在することは19世紀には既に分かっていたから、キリスト教による世界の包摂など全く楽観できなくなっていた。宣教するほどに未踏の地が発見されると「議員」は言う。

⁵⁰ *Ibid.*, JM p. 506 ; OC t. 4, pp. 105-106.

アメリカが発見されるのに 15 世紀以上かかりました。その広大な地には、今なお大いなる恩恵と全く関わりのない多くの野蛮な遊牧民がおり、生まれつき何か根源的で説明し難い呪いによって恩恵から排除されているように思わせられます。ドライ・ラマひとりでローマ教皇より多くの霊的臣下を持っています。ベンガルには 6000 万人、中国には 2 億人、日本には 2500 万人か 3000 万人の人口があります。今日では世界で 5 番目の部分を占める太平洋の多くの島々も考えてみてください。確かにフランスの宣教師たちは、そうした遠い地域に福音を伝道する驚くべき努力をしてきました、しかし、どれほど成功したかはご存じでしょう。朗報の届かなかった無数の者たちが、どれほどいることか！⁵¹

完璧な翻訳もあり得ないし、全ての翻訳もあり得ない。だが、言語が幾つにも分かれてしまった以上、翻訳がなければ分裂する一方なのだ。聖書協会に対する「伯爵」の忌避感と「議員」の過度な期待は、その両義性をよく表わしている。翻訳は、まがい物を流布させる叛徒かも知れないが、途方もない一体性への予兆を見出すとしたら、翻訳の試みのうちにおいてなのだ。

結論

本論では、はじめにメーストルの思想を政治・神学・言語という 3 つの側面から概観した。その全てにおいて、繰り返し現われるメーストルの世界観を、ふたつ見出すことができる。

ひとつは、同じものが違う形で繰り返し現われる、という見方だ。箴言ふうにあき出せば、『考察』の一節「わたしは蘇る、変化して、しかし同じものとして EADEM MUTATA RESURGO。」である。

政治、すなわち現世における秩序の支配については、副題に掲げられながらも『夜話』では殆ど語られないから、『考察』を参照することとなった。そこでは、現世で人間の作る秩序は必ず不完全であるから、破壊と構築が絶えず行なわれ、歴史は直線でも円環でもなく螺旋のように進んでゆく、という考えが述べられていた。立法の間歇性が、差異と反復に当たる。それこそが歴史の駆動力となっているのだ。

神学について、『夜話』の全体を通して読み取れるのは、メーストルの最も重要な思想が、人間の共同体は罰の可換性を基礎としている、という考えであることだ。この犠牲の原理は、しかしカトリックのみが正しく持っているのではない。どのような宗教にも、あらゆる人間の共同体に一致して見ら

⁵¹ *Ibid.*, JM p. 766 ; OC t. 5, p. 240.

れる原理であり、ゆえに真実なのだ。差異と反復は、真実の証である。さらに、罰の可換性をもたらすのは、原罪が形を変えて繰り返し現われることだ。原罪とは人間の自由意志であるとメーストルは述べていた。つまり原罪とは、歴史の駆動力となる間歇性のことでもあり、かつ人間を共同体たらしめる紐帯でもある。したがって、神学における差異と反復は、ふたつ挙げられていたことになる。罰の可換性が人間のあらゆる共同体において原理となっていることと、罰の可換性のもとになっている原罪の二次的な表われである。

言語論においては、神から与えられたはずの言語が次第に変化してゆくことを、言語に内在する力によるものとして、奇妙な造語論が説かれていた。この変化は、しかし言語の自己同一性を失わせるものではない。言語は、変わりつつも変わらないという不思議な性質を持っている。言語は多くの意味で差異と反復にかかわっている。

さらに言えば、内容だけでなく『夜話』の形式もまた、同一性と変奏を表わしている。鼎談の記録という体裁が示すとおり、たびたび話者は入れ替わり、文体は口語ふうで、類推や比喩を多用し、道筋は曲がりくねっている。だが全体を通読してみれば、言い回しを変えながらも言わんとすることは同じでないか、臃げな統一像が見えてくる。

もうひとつは、全ては分裂し、そして再統合に至る、という見方だ。これも箴言ふうにあき出せば、『夜話』の一節「われわれは混ざり合うためにこそ挽かれる *nous ne sommes broyés que pour être mêlés*」である。

政治については、メーストルを反動思想家たらしめている反革命という概念が、まさしくそれに当たる。メーストルは、既に破壊された革命以前の秩序を回復できるとも、また回復すべきとも考えない。反動思想家は、革命家と同じくらい強く、歴史の進展を信じている。ただし向きが逆なのだ。のちにメーストルは王政復古を評して「この革命は、ロベスピエールの時代よりも遥かに酷い⁵²」と述べる。王政復古もまた革命なのだ。目まぐるしい情況の変転にさらされ続けたメーストルは、永遠の革命を生きた。絶えざる変転、まさに近代の特徴である。メーストルは、あまりに近代的すぎた。

神学については、可換性という概念が、分裂と再統合を表わしている。原罪とは分裂であり、それに対する罰としての苦しみを分かち合うことで、人間どうしの繋がり、人間と神との繋がりが保たれている。この繋がりは、確かに完全なる合一ではない。というより、分裂しているからこそ繋がりが必

⁵² Lettre 539 au Chevalier d'Olry, 5 septembre 1818, OC t. 14, p. 148.

要なのだ。ひとたび分裂してしまったら、苦しみによって繋がりを確認し続けるより他ない。これがメーストルの神学であった。

言語論について見れば、先の箴言はもともと奇妙な造語法から導かれたものであった。単語が細切れにされ、切片が膠着することによって、それぞれの意味を昇華して、新しい単語が作られる。おそらく言語学的には間違っただ語源論だろう。しかしメーストルは、そこに言語の力強さを感じ取ったのだ。

さらに言えば、内容だけでなく『夜話』の形式もまた、分裂と再統合の過程であった。立場の異なる3人による鼎談集であり、引用の寄せ集めであり、話題はあちこちに飛び、「残りは欠けている」。魅力的な断片を様々に振り撒きながら、一貫した構成の下に収まってはいない。だが、それでもひとつの作品であり、全体を通して再統合の予兆が説かれている。

同じものが違う形で繰り返し現われること、全ては分裂したのちに再統合へと至ること、このふたつは、『夜話』の最後において提起されながらも話半ばで未完となってしまった、ペンテコステと聖書協会について展開されようとした考えを、微かに垣間見せてくれる。ペンテコステも聖書協会も、言語と布教にかかわっている。ペンテコステと対置されるバベルの逸話が示すとおり、どちらも言語の分裂によって人間全体の一体性が失われたこと、そして翻訳によって新たな一体性を招来しようとしていることを表わしている。

翻訳とは何だろうかと考えてみれば、今しがた述べた、メーストルの提示するふたつの世界観が、ただちに現われてくる。すなわち、ひとつは同じ内容を別の言語によって述べようという試みであること、もうひとつは離れた言語を架橋しようという試みであることだ。この主題は、だから『夜話』の最後を飾るのに相応しかった。メーストルの寿命という現世的制約のため、十分に語られることは叶わなかったが、翻訳という『夜話』の開かれた結論は、確かにメーストルの性格を表わしたものである。

過激で時代錯誤で取っつきにくいように思われるメーストルの書き遺したものは、後世にあって意外なほど広範かつ継続的な影響力を放っている。ドールヴィイ、ボードレール、トルストイ、シオラン、バルトといった、まったく趣向の異なる作家たちが、メーストルに影響を受けたと告白している。メーストル以後、メーストルの思想は様々に翻訳されたのだ。そうした後継者たちのメーストル理解は、各々が一面的で、極端で、行き過ぎている。だが、メーストルの著作は、その思想を自分の言葉で語り直したいという欲求を惹起する、不思議な魅力を持っている。